

三河妙源寺における真宗文化財について

安 藤 章 仁

桑子の妙源寺は、矢作川中流域に位置する愛知県岡崎市に所在する真宗高田派の寺院である。寺伝によれば、親鸞が関東から帰洛の折、桑子城主安藤薩摩守信平の請いによって、城内の太子堂で説法を行い、深く帰依した信平（念信坊蓮慶）が堂宇を建立したのが草創であると伝えている。

三河地方は、関東—京都の往来路の中間地点に当たることでもあって、草創期の真宗教団の要地として位置づけられ、多くの古刹や法宝物が現存している。その中で妙源寺は三河真宗念仏の最古の道場として中心的役割を担い、親鸞説法の伝承を持つ柳堂（太子堂）をはじめ、親鸞真蹟の十字名号、親鸞・法然・善光寺・聖徳太子（旧蔵）といった四種の絵伝や現存する最古の光明本尊など初期真宗教団における独特な文化財や多くの古文書を今日にまで伝世している。

そこで、小論では現存する妙源寺の主要法宝物を概観し、その傾向と特徴について窺ってみたいと思う。

伝世する法宝物の概要 表Ⅰ「桑子山主要法宝物一覧」は、

全てを網羅したものではないが、これによって伝世文化財の大凡の内容と傾向は窺い知ることができる。表Ⅰにおける制作年代および表Ⅱ「三河地方における真宗文化財の所在状況」（紙面の都合上割愛）を作成するにあたっては、『真宗重宝聚英』『真宗史料集成』（以上、同朋舎出版）『岡崎市史』等の文献を参照した。

妙源寺における真宗文化財の特徴 三河地方に現存する法宝物は、基本的に初期真宗門侶において用いられてきたものが、その縁の地域・場所に伝世してきたものとみなすことができるものが比較的多い。妙源寺においても、当寺の草創期の状況などから類推して、多くの法宝物についてそのように考えて妥当である言える。

その特徴については、主要法宝物の一覧（表Ⅰ）に見られる傾向から試論的に四部門に分け、次の点を指摘することができ

きる。

A群は、親鸞と直弟に関わるもので、A—1においては、

[illegible]

— 703 —

親鸞在世中における造形が、教義体系を非常に凝縮して具象化し、コンパクトで機能的なものであったこと、A-2では、親鸞直弟が、早い時期から親鸞の貴重な文献を書写する作業をなしていたことを伝えている。また、これら重宝の現存状況から、三河地域が初期真宗教団の教線進展の要地として非常に重視されていたことが理解される（表1参照）。

B群は、親鸞門下において展開される初期真宗教団の発展を象徴する真宗文化財で、B-1では、①草創期の教団の伝道形態が、絵解き説法に重点が置かれていたこと、②三河地方における特有な傾向として、四種絵伝が一具として常備されていたこと（表1参照）、③聖徳太子信仰が初期真宗教団の基盤の一つであったことなどが知られる。あわせて考えられるべきことは、真宗教団における造形に対する基本的態度が、親鸞においては「名号本尊」など教えが具象化されるが、性格的には教義的色彩が濃厚であったのに対し、その後の展開では、非常に視覚的表現やその効果が積極的に入り入れられ、しかも事績の絵解きを通して念仏を勧めるという手段が大勢的に行われた点である。またB-2については、A-2における伝統が、經典類の収集といったさらに幅広いかたちで踏襲されていたことを物語っている。

C群は、真宗寺院としての当寺の寺院形態が、非常に幅広く奥行きがあったことを示している。C-1における宝物の

請坐を受ける寛容性には、当寺が仏教に対して幅広く柔軟で、宗派意識が希薄であったこと、またC-2からは、対内外において宗派としては独立した真宗教団というよりは、法然浄土教の門流という意識および理解があったことが知られる。

最後のD群は、寺院の権威化する傾向と当寺の持つ歴史的性格を伝えるものである。D-1は、親鸞とのつながりを強調するもので、初期真宗教団の地理的分布を伝える資料②における唯一の改竄の跡（念信を親鸞面授とする）には、如実にその意図が窺われる。また⑦では、親鸞とのつながりを連座像ではなく、夢を通してより親近感を持って表現しているところに大きな特色がある。D-2②⑨は、先学の研究に考証される中世の真宗寺院の性格が土豪的・地侍的であるとする、その機能的側面を有していたことを示すものである。さらに③⑩においては、武家社会との文化的交流があったことも伝えている。ここには在地支配者と昵懇を結んだ当寺が、在地武士群の菩提所の性格を持って発展するとともに高利貸的活動を行う在地領主的性格をも有していたことを窺知することができる。

〈キーワード〉 妙源寺、真宗文化財、三河地方

（龍谷大学大学院）